

(二〇一九年四月十五日 お速夜法要)

「カルト」の楽しさ、「自由」のしんどさ

竹内 綱史

(経営学部 准教授)

竹内 綱史 (たけうち つなふみ)

1977年 生まれ、東京都出身。

2005年 京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。

2005年 龍谷大学非常勤講師。

2006年 日本学術振興会特別研究員PD(大阪大学文学研究科)。

2009年 龍谷大学経営学部専任講師。

2015年 同経営学部准教授に昇任。

専門分野は宗教哲学。博士(文学/京都大学 2008年)。

【著作】

『ディアロゴス ―手探りの中の対話』(共著/晃洋書房 '07年)

『西洋哲学の10冊』(共著/岩波ジュニア新書 '09年)

『哲学と大学』(共著/未来社 '09年)

『エシックス・センス ―倫理学の目を開け』(共著/ナカニシヤ出版 '13年)

『続・ハイデガー読本』(共著/法政大学出版局 '16年)

『世界哲学史7』(共著/ちくま新書 '20年)

『European / Supra-European: Cultural Encounters in Nietzsche's Philosophy』
(共著/De Gruyter '20年)

『自由精神と自由意志 ―「人間的、あまりに人間的」におけるニーチェの自由論』
(『倫理学研究』第38号/'08年)

『「悲劇の誕生」の形而上学再考』(『龍谷哲学論集』第25号/'11年)

『ニーチェにおけるニヒリズムと身体』(『宗教哲学研究』第33号/'16年)

『「神は死んだ」のか? ―ニーチェにおける宗教と科学』
(『ショーペンハウアー研究』第23号/'18年)

『超越者なき自己超越 ―ニーチェにおける超越と倫理』
(『倫理学研究』第49号/'19年)

『ニーチェの同情=共苦批判について』(『龍谷哲学論集』第34号/'20年)

『Think Rationally but Feel Spiritually: A Nihilistic Dualism in Modern Japan』
(『Teoria. Rivista di filosofia』Vol.40 No.1/'20年)

ほか多数。

竹内と申します。よろしく申し上げます。私は、経営学部所属ですけれども、教養で宗教学を担当しております。研究上の専門は近現代ドイツの宗教哲学です。

今日は「カルト」についてお話ししますが、いま述べましたように、私は専門家というわけではありません。ただ、深草学舎では宗教学担当教員は私だけということもあり、授業あるいは他のかたちでも、キャンパス内に限らず、さまざまなカルト問題などを扱ったり勉強したりしております。

大学のキャンパスは、カルト教団あるいはカルト集団にとって非常に都合のよい場所で、昔からさまざまなカルトが活動してきました。今まで多くの学生がキャンパス内の勧誘がきっかけでそういった集団に入ってしまったことが知られています。

今日のお話のタイトルは『「カルト」の楽しさ、『自由』のしんどさ』です。ちょっと奇をてらったというか、インパクトを狙ったようなタイトルですが、カルトという問題を考えるうえでおそらくここが一番重要なのではないかと私が考えていることについてお話ししたいと思います。

「カルト」の一般的イメージ

「カルト」の一般的イメージは、「わけのわからないことをしている集団」であったり、「現実から逃げたくてハマっちゃうモノ」であったりします。日本の場合はオウム真理教という教団が大きな事件を起こして、あの事件と教団がカルトのイメージを決定づけていますから、多くの方は「反社会的なことをたくらんでいる人たち」というイメージをお持ちであろうと思います。

そうであれば、「自分には関係ない」「そんなものに自分が関わるはずがない」と思うのが普通でしょう。そもそも「カルト」という呼称で呼び、レッテルを貼ること自体に「自分たちとは関係がない人たち」というニュアンスがあります。

しかしながら、今日は、「自分には関係ない」とか「そんなものに自分が関わるはずがない」といった一般的な「カルト」イメージに対して、本当にそうですか、そうではないのではないですか、ということについてお話をしたいと思います。

「カルト」の実際

「カルト」の実際はどのようなものか、考えてみましょう。

まず、最初接触すると、「親切で品行方正で道徳的な人」という印象を持つことが多いと言われています。オウム真理教は典型的ですが、この世の汚さみたいなものにあきれ果てて、もっときれいな世界を求めて、カルトに入る人が多いわけですから、カルトに入る人たちは道徳的に正しい人たちに見えます。世の中のことについて真剣に考えていて、とても真面目です。さまざまな不正や世の中に横行している悪に対して憤りを持っている。すごくいい人たちに見えるのです。

これはよくある話だと言われていますが、大学生になった子どもがカルトに入ってハマってしまった時、その子の親が持つ最初の印象は「親孝行するようになった」「ちゃんとした子どもになった」というものです。それが実はカルト集団に入ったことの兆候なのです。しかし、最初は親御さんが喜ぶような変化が見られません。

「仲間」と「やりがい」

キャンパス内で「カルト」と呼ばれる集団が学生を勧誘する時には、非常に親切的な先輩として勧誘をします。カルトには、悩みに親身になってくれる「仲間」がいます。例えば履修についてすごく親切に教えてくれるとか、キャンパスでの生活についていつでも相談にのってくれたりする。

また、カルトには、ものすごくやりがいがあります。いつでもどこでも「すべきこと」が極めて明瞭で、「迷う」ことが一切ない。どんな時でも、「こういう時はこうすべき」ということがハッキリしていて、選択に迷う必要がなくなる。そしてハッキリとした目標に向かって一緒に頑張れる「仲間」がいるのです。

ですので、入ってしまうと充実した日々を過ごすことができるのです。

後に違和感を持ってトラブルになることがよくあるわけですが、少なくとも最初はとても楽しいものである可能性が高い。それが魅力であり、また同時に、危険なのです。

「カルト」の「魅力」

カルトの「魅力」とは何でしょうか。私はさしあたり三つあると考えています。

- ① 仲間との絆が強く、さまざまなことについて仲間たちが親身になって一緒に悩んでくれる。一緒に頑張ってくれる。そして、ちょっとした進歩、ちょっとした頑張りをみんなが褒めてくれるのです。それは非常に居心地がいいのです。
- ② 世の中のさまざまな問題に対して明確なスタンスがあって、どんな問題に対しても、ハッキリとした態度で、「ここは良くない」とか「ここが間違っている」と示してくれます。
- ③ 価値観にブレがなく、常に明確な「答え」が存在します。それはとても楽だし、魅力的なわけです。

けれども、この三つの「魅力」そのものが、同時に非常に危険なのです。

①仲間との「絆」が強いということは、「仲間」（味方）と「それ以外」（敵）の境界線がハッキリしているということです。仲間に対しては非常に優しいが、それ以外に対しては非常に強い態度に出る。批判的な態度、いやもつと言えば非難する態度をとる。そこがハッキリしています。「味方」と「敵」という表現をしましたが、外部に敵がいると内部が結束するのは、古今東西、普遍的に見られる真理です。外を批判し非難することによって内側が結束して、どんどん絆が深まっています。

②世の中に疑問を持つからこそ「反社会的」な集団をつくっているわけですから、世の中の諸問題に対する明確なスタンスがあるというのは当然のことです。そして、世の中の問題や汚さにあきれ果てて、正しいことを探しているような人が、「カルト」と呼ばれるような集団にたどり着くということは、非常によく見られることなのです。オウム真理教でも、世の中に疑問を持ち、真面目に世の中の問題を考え、それを解決したいという強い気持ちを持ち、試行錯誤するからこそ、入ってしまったという人が少なからずいたわけです。

③ 価値観にブレがないのは美德に見えます。しかし、それは独断的であることの裏返しです。現代社会には多様な価値観があり、その共存が根本的な前提です。しかし、ブレない人というのは、往々にして、多様性を認めません。独断的な価値観を絶対的に信奉しているからこそ、ハッキリとした価値判断がいつでもできるのです。

授業をしていても思います。学問にはハッキリとした答えはなかなかないわけです。しかし学生はハッキリとした答えを聞きたがります。私は宗教学の授業をしているわけですけれども、「宗教とは何か、という問いに対する答えはありません」と必ず強調します。すると、「だったらそんなことを考えても意味がないじゃないですか」とか、「結局、どうなんですか」と聞きたがる学生はとて多い。しかし、ハッキリとした答えはないのです。

今のは学問の話ですが、一般的に言っても、何らかの問題について絶対に正しいと言えることなど、そうそうありません。「どれが正しいかわからない」というのが価値観の多様性なのです。しかし、それが菌がゆく見えるし、それに対して明確な答えをハッキリと持っていて、ブレがないことは非常に魅力的に見えます。しかし、それは同時に、危険だということなのです。

「カルト」の危険性

「カルト」の「危険性」をひとことで言うなら、「自由」が無いということになると私は考えています。

絶対的な価値観があつてブレないというのは、逆に言えば、メンバーがさまざまな価値観を持つて自分の意見を言ったり、問題に対して批判したりすることができないということです。「こちらのほうがいいんじゃないか」とか言ったりする自由が無い、ということになるわけです。この自由の無さというものが、カルトの「危険性」であり、同時にカルトの「魅力」であるということが、大きなポイントだと私は思っています。

「カルト」の定義

ここで、「カルト」の定義を紹介しておきたいと思えます。

「カルト」とは、「反社会的な（新）宗教集団」と定義されることが多いです。しかし、「反社

「会性」というのは相対的な概念で、時代や場所、国、文化によって異なります。ですので、カルトを具体的かつ明確に定義することは難しいです。とはいえ、現代日本においては、「反社会性」の一番の指標は「人権侵害をしているかどうか」という点になります。

自分たちとは全然違う価値観を持った人たちをすぐに「カルト」と呼びたがる人がいますが、それはやめておいたほうがいいですね。「カルト」は「反社会的な集団」というレッテルです。そのレッテルを貼るということは、「あいつらはヤバい奴らで、社会から排除すべきだ」という意味を持ちます。ですから、むしろ、「カルト」と呼んで非難する側が人権侵害をしている可能性があります。そこは気をつけなければいけません。

カルト問題で、さまざまな訴訟が起きていますけれども、多くの場合、人権侵害が争点になります。カルトと呼ばれる集団を批判する側は、その内部で人権侵害が起きていると主張するわけですが、集団側は、むしろ非難している側が人権侵害をしていると主張するわけです。「信教の自由を否定している」と、逆に批判されることにもなり得ます。「カルト」として非難した側が間違っているという判決が出ることも時々あります。「カルト」という言葉は、使い方に気を付けなければいけません。

カルトの人権侵害として最も一般的なものが、「自由のはく奪」です。具体的には、まず、そのカルト集団のメンバーには脱会する自由がない。それから、個人的な意見を持ったり表明したりする自由が制限されます。場合によっては、行動の自由が制限されることも起こります。

しかしながら、脱会する自由がないことがポイントにはなるのですけれども、多くの場合、集団側は「脱会の自由を認めている」と言うことが多いのです。ただ、内部に入り込んでしまうと、建前上は自由を認めていても、自らそこを出ることにすごく負い目を感じようになっていくわけです。

例えば大学であれば、宗教的な集団であることを隠して学生を勧誘するケースがあります。偽装サークルを作って勧誘をする。そこには親切的先輩や真面目な仲間がいて非常に居心地がいい。そこでバーベキューをしたりして仲よくなつて、人間関係が密になってきたところで、「会わせたい人がいる」とか「セミナーに出てみないか」といった話になっていくわけです。

かたちとしては断れると言えど断れませんが、実際には断ることはすごく難しい。入っていけばその中では、やることなすこと、正しいか間違っているかがハッキリしているわけですから、「そこから出ることは間違ったことだ」と植えつけられてしまう。「植えつける」というのは

言い過ぎかも知れませんが、そういう雰囲気になるわけです。そこで辞めるのは結構難しかったです。

ひと言で「自由のはく奪」と言っても内実は難しく、「外的な束縛は特にしていません」と言いつつ、内面的にもすごく負い目を感じさせるような構造を持っていたりするわけです。そういう意味でも、内面を占領してしまつて、自由を奪つていくという側面が「カルト」にはあります。

個人的意見を持ちたり表明したりする自由が制限されるというのも、「カルト」にはハッキリとした価値観がありますから、それに対して異を唱えること自体が間違つたことになるわけです。ですから、その価値観を信じ込んでしまつたら、そもそも異を唱えることはできなくなつていくわけです。さまざまな疑問を持つことも、疑問を持つこと自体、自分自身の修行が足りないのだとか、自分自身がまだちゃんとわかつていないのだとか、そういうふうになつてしまいがちです。そして行動の自由も制限されることが多いのです。

それが露顕するとか「何かちょっとおかしいんじゃないか」という話になるのは、授業に出て来られなくなるとか、家に帰つて来なくなるとか、そういうことが起こるからです。その集

団の中ですべきことが優先され、それ以外のことは無価値とされてしまいますので、「授業なんかに出るよりも、ここでこういうことをするべきだし、そのほうがあなたにとっても素晴らしいことなのだから、ここにいなさい」ということで、日常生活に支障をきたすようになったりします。

以上が一応、「カルト」の定義をめぐるお話でした。しかし、注意点が一つあります。「カルト」という言葉は反社会的な集団という意味を持っていますので、宗教学とか、中立的で客観的な立場を旨とする学問的な場では、「カルト」という語を使うことはあまりありません。要するに、何らかの集団を「カルト」認定するというのは、それはもう価値的に間違った集団という認定をすることになりますので、学問上それはしないことが多いです。

もちろん、さまざまな問題が起きていて、その問題について分析をすることはありますけれども、宗教学研究などにおいて、ある集団を最初からカルト認定して、その集団の危険性を明らかにするような態度は一般的にはとりません。

オウム事件の時に宗教学者として中立的な立場をとった人もいましたが、その瞬間に「お前はオウムの味方か」という話にもなってしまう。また逆に、オウムの側が客観的・中立的であることを標榜して価値判断をしない宗教学者を利用するということが起きたりもして、学問的にも

大きな問題を投げ掛けてはいます。

「自由」のしんどさ

「自由のはく奪」というカルトの特徴が一方で魅力でもある、と先ほど述べました。それはどういうことでしょうか。

しばしば忘れられがちですが、「自由」はとてもしんどいものです。単純化して言うのであれば、「自分で考え自分で選択し、その結果に自ら責任を負うこと」が、「自由」の一般的な意味内実です。それは楽じゃないですよ。自己責任を負うというのはとてもしんどいわけです。逆に、「他人に思考を明け渡して選択を任せてしまうこと」はとても楽なのです。

例えば、大学に入って、「自分は何がやりたいのか」「どういうことをするのか」といったことを全部自分で選択して決めるということはかなり大変です。ですから、さまざまな人にアドバイスや意見を求めたり、友だちと一緒に授業を選択したりするわけです。他人に思考を明け渡して、選択を任せてしまえば、もしうまく行かなくてもそれは自分のせいじゃないと思えます。しかも、

それを選択した他人に、非難の矛先を向けることもできてしまいます。

特に、社会が複雑化して、価値観が多様化した現代では、自由は非常に「重荷」です。最近、常識とかマナーとかをやたらと知りたがる人が多いわけですけど、それは、自分で考えるのではなくて、周りに合わせて、一般的にはどうなのか、常識的にはどうなのかみたいなことを知ることがっているわけですから、現代において自由が重荷だということの表れではないかと思えます。大学は自由な場所であるというのが大学の理念です。大学は自由でなければなりません。

しかし、高校まで手取り足取り指導をしてもらっていたのが、大学に入るといきなりそういうことが一切なくなると、「全部自分でやってください」となる。急に大人扱いされるわけですから、そうすると、すごく「重荷」で、どうすればよいかわからなくなる。右も左もわからなくて、ものすごく不安になったりします。そこに親身な人が寄ってきて、カルト集団みたいなところにハマり込んでいってしまうことが頻繁に起きます。ですから学生のみなさんはどうか気をつけてほしい。特に大学に入りたての新生とかが格好のターゲットになって、そういう集団へとハマっていってしまうことが、昔からよく起きています。

この「自由」のしんどさみたいな話は、実は昔からよく指摘されていたことです。

ここで、一冊の有名な本を紹介しておきたいと思います。八十年ぐらい前の本ですが、エーリッヒ・フロム（一九〇〇～一九八〇）という社会心理学者の『自由からの逃走』（Escape from Freedom）という本です。

この本は一九四一年に書かれています。フロムはドイツ人ですがユダヤ系で、ナチスに追われてアメリカに渡り、戦争がまだ終わっていない時期に、ナチズムみたいなものがなぜ起こったのか、その社会心理学的背景を分析しました。この本は、現代日本も含めた現代社会の状況を八十年前にハッキリと書いている本として、近年になってまた注目を集めています。それは、人々が自ら自由を捨てて、フロムの言う「権威主義」、つまり、誰かから命令されることを喜んで受け入れてしまうようなことがどんどん増えて、おかしな社会になってしまっているというのです。今読むと少し物足りないところもありますが、非常に読みやすいし、非常にクリアに、自由から人々が逃げ出していく逃走のメカニズムを明らかにしている本です。

「自由」というのは近代の麗しき理念でした。皆さんご存じのように、人々は自由を獲得するために長い間戦って、その戦いに勝利することで、やっと自由を獲得していったわけです。「自由」

とは、人々が命懸けで追求するなかでやっと徐々に実現していくという、麗しき理念だったはずなのです。しかし、それが同時に、忌むべき呪いでもあって、ナチズムみたいなもの、あるいは全体主義、権威主義みたいなもの呼び込むことになってしまった。フロムはそういうことを明らかにしています。

一部を引用しておきましょう。

・「自由は近代人に独立と合理性とを与えたが、一方個人を孤独におとしいれ、そのため個人を不安な無力なものにした。この孤独はたえがたいものである。かれは自由の重荷から逃れて新しい依存と従属を求めるか、あるいは人間の独自性と個性とにもとづいた積極的な自由の完全な実現に進むかの二者択一に迫られる」。

（『自由からの逃走』邦訳4頁／傍線…講師）

・「われわれの目標は、近代社会の機構が同時に二つの仕方で人間に影響をあたえていることを示すことである。その二つの仕方というのは、人間はよりいっそう独立的、自律的、批判的になったことと、よりいっそう孤立した、孤独な、恐怖にみちたものになったことである」。

（同120～121頁／傍線…講師）

・「ひとは「…からの自由」の重荷にたえていくことはできない。かれらは消極的自由から積極的自由へと進むことができないかぎり、けつきよく自由から逃れようとするほかないであらう。現代における逃避の主要な社会的通路はファシスト国家におこったような指導者への隷属であり、またわれわれ民主主義国家にひろくいきわたっている強制的な画一化である」。

(同150～151頁／傍線・講師)

とにかく自由というものがどんどん実現されてきたけれども、やっと実現されたと思ったら、その自由から逃げ出す人がどんどん増えてくる、と。むしろその自由の重荷から逃れることの方が一般化してしまっているのではないのか、ということの問題にしているわけです。

ただ、もちろんそれは自由の間違った用い方であって、むしろわれわれは「積極的自由」——本当の自由の実現に向けて努力する必要があるはずだと、そういうことをフロムは論じています。自由を実現してきた社会においては、「自由からの逃走」か「自由の本当の実現」か、その二者択一に直面して、多くの人々は逃走を選ぶということが起きてしまうと論じているのです。

積極的自由

それでは、積極的自由とはどういうものか。

まず、「束縛からの自由」は「消極的自由」だと言われます。社会が近代化していく過程で、さまざまなしがらみから人々は自由になって解放されていったわけです。しかし、そうやって消極的自由、さまざまな束縛からの自由が達成されるだけでは、単に寄る辺のない状態へと人は投げ出されるだけで、むしろまったくの空虚の中で手足をバタバタしているような、不安な状態になってしまう、とフロムは言います。だから、結局人はそこから逃走して、新たな「依存」や「隷属」へと向かってしまうことがある、と。

ですからフロムは、それに対して、「積極的自由」、それは「…への自由」と言ったりしますが、そちらへと進まなければならないと主張しています。

フロムは、「積極的な自由は全統一的なパーソナリティの自発的な行為のうち存する」(『自由からの逃走』邦訳284頁) という言い方をしていますが、私の目からすると少し樂觀的すぎるし、そういうことができなくて、そういうことがしんどいから逃げているんじゃないのか、とも思い

ます。

けれども、フロムが言いたかったこと、あるいは私たちが受けとめるべきことは、単に束縛から解放されてそれで終わりということではなくて、その自由を何に用いるのかを自ら不斷に常に問い続けなければいけないし、その努力があつてはじめて自由は本当の自由になっていくのだ、という主張だというふうに理解することができらるうと思ひます。

まとめ

最後にまとめておきます。

「カルト」はとても「楽しい」可能性があります。その楽しさの一つの理由は「自由が無いこと」にあるということをお話ししました。そして、カルトの危険性もまた、「自由が無いこと」にあります。

価値観がハッキリしていて明確な答えを持っている人にすべてお任せして、それに自らの自由をすべて明け渡すことは、確かに楽かも知れません。自由を明け渡すことは非常に楽だということ

とで、それをフロムは「自由からの逃走」と呼んだわけです。先ほど紹介したフロムの著書は、そのメカニズムをかなり細かく、さまざまに明らかにした本であり、今まさに、読むに値する本ではないかと思えます。

そして最後にお話ししたのは、「自由」は、単に「束縛からの解放」だけではなく、その自由を何に用いるかを自ら不断に問い続けなければいけないのだということでした。問い続けるといふのは非常に難しいし、大変な作業です。自分で考えて自分で選んで、そして、その結果に自分で責任を負うことは確かにしんどい面があります。しかし、同時に、それはとても楽しいことでもあります。自分で考えて選択することは、とても楽しいことです。非常に充実感を伴うことでもあるわけです。そのことをここで強調しておきたいと思えます。

「カルト」と呼ばれる集団は価値観がハッキリしていて、善悪がくつきりしていて、常に明確な答えを持っていることがあって、それはとても魅力的にも見えますけれども、世の中のこと、あるいは人生と言ってもいいですが、そういうことに答えはありません。少なくとも生身の人間で、そういう大きな問題について答えを見つけたとか、答えを知っているという人たちは、間違はなく嘘つきです。あるいは間違っている。本人が信じ込んでいる可能性もあるので、「嘘つき」

ではないかもしれませんが、「間違っている」のは確かでしょう。

特に新人生は右も左も分からなくていろいろなことを不安に思ったりするのでしょうか、安心してほしいのは、どんな大人たちも、親も教師も、お坊さんたちだって、みんな迷っているのです。迷い続けているし、答えなんて誰も見つけていない。そういうものだと思っただければよいかなと思います。そして、自らの自由を行使するために、不断に常にさまざまなことを学び、問い続けることを続けてほしいなと思います。以上です。

ご静聴ありがとうございました。

【参考文献】

- ・ エーリツヒ・フロム『自由からの逃走』、日高六郎訳、東京創元社、一九六五年（新版）。
- ・ 櫻井義秀『「カルト」を問い直す——信教の自由というリスク』、中公新書ラクレ、二〇〇六年。
- ・ 櫻井義秀編著『カルトとスピリチュアリティ——現代日本における「救い」と「癒し」のゆくえ』、ミネルヴァ書房、二〇〇九年。
- ・ 櫻井義秀『カルト問題と公共性——裁判・メディア・宗教研究はどう論じたか』、北海道大学出版会、二〇一四年。
- ・ 脱カルト協会編『カルトからの脱会と回復のための手引——〈必ず光が見えてくる〉本人・家族・相談者が対話を続けるために』、遠見書房、二〇〇九年。
- ・ 竹内綱史『「カルト」問題と大学』、二〇一一年度龍谷大学経営学部人権問題研修会講演原稿。

（文責在宗教部）